

平成28年度 ボランティア・レンジャー育成研修会実施記録

主催：野幌森林公園 自然ふれあい交流館（指定管理者：一般財団法人北海道歴史文化財団）

共催：北海道ボランティア・レンジャー協議会

開催期間：平成28年8月26日（金）～28日（日）

受講者数：7名

プログラム

8月26日（金）第1日目 10:00～19:00

開講式

主催者等挨拶

自然ふれあい交流館長 松井則彰氏・北海道ボランティア・レンジャー協議会副会長 小林英世氏
より開会の挨拶

野外実習【アウトドアゲーム】～自然とのふれあいを楽しむ～

交流館スタッフによるアウトドアゲーム

研修生の緊張緩和の手法として、野外でアウトドアゲームを行い、ゲームの中で自己紹介するなどの手法でグループ結成の雰囲気を演出した。

救急法（普通救命講習1）講師：江別市消防本部

野外活動を行う際に如何に救急救命措置が大切であることをスライドで解説した後救命実技の実習を実施した。

- 内容
- ①心肺蘇生法 胸骨圧迫、AEDの使用方法
 - ②異物除去法 腹部突き上げ法
 - ③止血法、直接圧迫止血法
 - ④骨折に対する応急手当

(4) 講義【自然ガイドで何を伝えるか】

講師：鎌田恵実氏（自然ウォッチングセンター）

- ①自然ガイドをするにあたっては、当然のことではあるが、自然に興味、関心を持ち、自然のことを大切に考えて行動することがもともとなっている。自然ガイドは自然と人間を結びつける意味で（Interpreter）とも呼ばれる。
- ②実際ガイドをする際には、自然が好きになってもらうためには五感等を通して直接体験し重要である。
- ③講義の後半では、セイダカアワダチソウとオオアワダチソウを持ってきて、花、葉、茎などにふれ、違いを直接体験をした。



(5) **野外実習【ナイトウォッチング】** 講師（自然ふれあい交流館 スタッフ）

夜の森林公園の遊歩道を交流館のスタッフが案内、光のない中での距離感、コウモリの声を聴ける超音波受信機を携帯し、夜の森を体感した。

8月27日（土）第2日目 10：00～18：00

(1) **講義【リスクマネジメント】** 講師：宮本健市氏（北海道ボランティア・レンジャー協議会）

自然の中は楽しいことばかりではなく危険が潜み、ガイドをするには如何にこの危険を回避するかが重要であることを講義した。

①自然の中には地学的、気象的な要因や生物的要因などによる危険が多くあるので、事故のない観察会にする。

②特にスズメバチに注意する。

刺されないための注意→黒色の衣服を避け、長袖で、香水を使用しない

ハチに出会った際には→ハチが威嚇して飛び回るときには静かにその場を去る。

刺された際には、ポイズンリムーバ等で毒液を吸引、刺された場所を冷やして抗ヒスタミン軟膏などを塗り病院へ。

(2) **野外実習【自然観察会】**

～ボランティア・レンジャーの活動の実際～

～自然体験活動の指導法～

野外実習はエゾユズリハコースで、二班体制とし、各班はボラレンの講師が引率し植物の解説、森林公園の概要などを説明しながら実習を実施した。



(3) **講義【自然について～森林について～】**

講師：三輪礼二郎氏（北海道ボランティア・レンジャー協議会）

森林の生態などの、大きな視点から日本の森林、野幌の森林公園について話された。

①野幌森林公園には原生林はなく二次林で、その生成は陽樹から陰樹、さらに極相として陰樹の森になっていくであろう。

②光合成をする緑の森は多くの昆虫や鳥を育て、人間にとっては癒しの空間を形成し、木材資源を生産し、自然災害を防ぐなど多面的役割を担っている。

③自然界にはいくつかの大きな物質の循環がある。木々が成長し、一生を終えることを通して植物が利用可能な窒素の循環や他の無機質の循環がある。

(4) **講義【プログラム作成と解説方法（導入）】**

講師：小林英世氏（北海道ボランティア・レンジャー協議会）

1. プログラムの作成には、観察会のネタをつくり、そのテーマの意図→下見などをして素材収集→時間配分等の検討→役割分担を決める。
2. 観察会では全体的視野を持ちながらも、植物たちの生態等を五感を使ったりして楽しみを深めながらも人間との関わりなど確かめてみる。図鑑、自作の図表、写真、カードなど補助道具が役に立つ。
3. ガイドをする際、参加者は聞いただけでは忘れてしまうことも多く、見たこと、体験し確かめたことなどは記憶に残る。
4. 植物と人間の関わりでトクサを紹介。トクサが楽器などの板の面を滑らかに削る機能を持ちサウンドペーパーと比較しながら講義をした。

(5) 実習 【プログラム作成と解説方法】

～観察会模擬解説～

1. テーマ エゾフクロウの生態 発表 宮本 健市氏
フクロウの分布、形態にふれられる。フクロウの優れた政界にふれ、花は飛んでも音がしないような仕組みに、首は180度回して周囲を確かめることが可能に、更に、目は人間の100倍の超能力を持っている。
2. テーマ ふみ草植物 発表 小林 英世氏
踏みつけられても元気に育っている植物たち。草原からブタナ、コゴミなどを見ながらその生態を語り合う。
3. テーマ シダ植物について 発表 室野 文男氏
歩きながらシダを見つける。トクサ、ミヤマベニシダ、コゴミなど。その特徴を説明。室野さんが作成した森林公園の地図をもとにシダの分布にふれる
4. テーマ植生調査のコドロード調査法 発表 宮津 京子氏
一定の空間を固定して、そこに生成する植物の被度・・・地面を覆う度合・・・、群後・・・分布様式・・・などを調査し、それがどう変わってゆくのか図表、写真など用いて記録する。実際そのエリア内の植物を取上げて記載するなど実習を行った。

～グループワークによる10分間ミニ観察会プログラム作成～

講師：北海道ボランティア・レンジャー協議会・自然ふれあい交流館

A班、B班それぞれミニ観察会のプログラム作成準備に入る

各班メンバーで真剣なグループ討議開始 テーマは何か、資料の収集、担当者の役割分担など相談をしテーマをそれぞれ決定した。

A班「ヒッチハイクをする種」 B班「虫こぶの不思議」

8月28日(日) 第3日 10:00~16:30

(1) 実習【プログラム作成】

～グループワークによる10分間のミニ観察会プログラム作成～

午後のフィールド発表に向けて資料の作成や発表の事前予行練習などした。

(2) 発表【フィールド発表】

B班 タイトル 「虫こぶの不思議」

キツリフネ、シナノキなどの実物をルーペなどでその形、色彩などを観察してもらいながら説明をする。シナノキハコブフシはタマバエによって葉は赤色に膨れ、幼虫の生活の部屋である。



A班 タイトル 「ヒッチハイクをする種」

植物たちが生きるための戦略・種子の拡散、ヤブジラミ、ノブキ、キンミズヒキなどを観察しながらその様子確かめる。図解などで説明を加えながら。



(3) ふりかえり

～グループごとに発表した内容を振り返る～

講師 安倍 隆氏 (北海道ボランティア・レンジャー協議会)

フィールドで発表したA, B班に反省点を出してもらう。

1. 絶えず改善点を見つけ、今後の活動に活かしてもらう。
2. 安全管理に心がける。
3. 参加者に何を持って帰ってもらいたいのか、その目的(目標)と対象物、その関連を説明するための工夫、演出など。
4. 自然を楽しみの場として。レーチル・カーソンの著書「センス オブ ワンダー」の一説を朗読しながら紹介した。

各班の発表に適切な講評をした。

(4) まとめ・講義

【北海道ボランティア・レンジャー協議会とボランティアを行なうにあたって】

講師 春日 順雄氏 (北海道ボランティア・レンジャー協議会会長)

自然観察会の実践的経験を踏まえて<いい案内人になろう>というテーマで、総括的に話された。知識を磨き、センスを磨こう、以下4つにまとめられた。

- 1 案内の技術 いい内容、いい説明をめざして
- 2 自然観 自然への畏敬のきもちを持つこと。野山は植物たちの光合成の大工場であり、その恵みで生物たちは生きている。宮沢賢治などを引用しながら。
3. 自然に向き合ってセンス(感受性)を育てること。自分の持っている問題意識や体験などが相互にかかわって志が形成されてくる。<いい案内人>はたえず自然に向き合い、そこから真摯に学んでいくことである。

私たちの仲間は、この研修会でいろいろな分野での講師を担当し、それぞれが自然への深い理解にもとづいた内容の豊かなものでした。

最後に春日会長は<いい案内人になろう>という立場から、独自な見解を語りながら、それらを総合的視点からまとめられ、充実した育成研修会であった。

閉講式

自然ふれあい交流館 松井館長による修了証書の授与、挨拶をもって、三日間の育成研修会を無事終了した。



(以上文責 新谷良一)